エヴェレットの多世界解釈と深淵重力次元絶対不滅幻想

アビスグラヴィティディメンション

アブソリュートエターナルファンタズム

この太中小説は
文豪ストレイドッグスわん！
の異能中学生ネタです。
アニメ5話か原作5巻#81を
見てから読んでね！

Eins Zwei Drei

・第十三刻印（すてぃぐまおぶゆだ）
世界の救済と断罪を選択する力を秘めた聖痕。
聖人を殺した弟子を示す13は呪われた数字であり、
第十三刻印は「愚か者の刻印」とも呼ばれ、いつか
十二人の裁定の場に現れ、その決定を覆す者が
継承すると伝えられてい

羅刹　修羅　悪鬼　薔薇　醤油

Nur wer die Sehnsucht kennt,
Weiß, was ich leide!

勝手に書かないで！
…のろうよ？

夢は潜在的な願望
~~性的衝動~~

太宰治は夢を見ていた。

このところ、同じ夢ばかり見る。

大人の姿をした僕が、都内ではなくなぜか横浜で暮らしている。住んでいる部屋や仕事は夢を見る度に少し違っているけれど、夢の中の僕にとっては大差ないことだった。

夢の中の僕は、異能力という特別な力を持っていた。異能力を持つ人間は、夢の世界では他にも沢山いる。そういった人間は異能力者と呼ばれ、所属している組織や立場が違うと、互いの利害を巡って争いになることも多かった。政治家が口で言い争うようなものではない、命を奪い合う抗争だ。

異能力でできることは異能力者一人に対して一つだけど、自分の姿を虎に変えたり、手帳の頁を銃に変えたり、布がなんか黒くて強いやつに変わったり、ガラケーでなんかデカくて強いやつを召喚したり、割と何でもありみたいだった。ちなみに僕の異能力は、『人間失格』――異能無効化の能力で、対象に触れるだけでどんな異能力でもその発動をキャンセルすることができるんだ。異能力者本人はもちろん、異能力の影響が及んでいる人間や物体に対しても有効。まさに無敵だね。ちょっと地味なのが難点だけど。

夢を見ている間は、夢の中の太宰治という機体の中に僕が乗り込んでいるような感じで、と言っても自由に操縦できるわけじゃなく、夢の中の太宰治が歩いたり喋ったりしているのを、太宰治の視点と、俯瞰した第三者の視点で同時に見つめている、不思議な感覚だった。自分に目が四つあるみたいなんだ。

「……っていう感じなんだけど、中也はそういう夢を見ることある？」

「見ねぇ。っつか、なんで手前が俺のクラスにいんだよ、太宰」

「だって屋上、雨で濡れてるし」

給食のコッペパンをちまちま指でちぎりながら口に運びつつそう言うと、なんだその食い方女子かよ、と嫌な顔をされた。

中也の席は、2年B組の窓際前から2番目。彼の前の席の生徒は不登校だとかでいつも休みだから、お昼にこうして隣のクラスの僕が勝手に机を動かしても、誰にも文句を言われない。

あ、中也はいちいち五月蠅いけどね。机をくっつけるなとか何とか。じゃあ前じゃなくて隣に座れって言うの？　厭だよ、また仲が良いと誤解されてしまうじゃないか。

「いつも先に屋上にいやがると思ったら、飯食うダチもいねぇのかよ。ダッセ」

「そういうんじゃないよ。うるさいところで食べたくないし…っていうか、そんなの中也だって同じじゃない」
「なっ…！　俺はちっげぇよ！　強さってのは…男を、孤独にするもんだからよ……」
「ねぇ、このミートソースみたいなやつ、献立表には『スラッピージョー』って書いてるけどさ、ミートソースと何が違うんだと思う？」
「無視すんな！　とにかく俺は自分から孤高の道を進んでんの！　手前とはちげーの」
「僕もそうだし。僕と関わったら、クラスのみんなに僕の呪われし第十三刻印（ステイグマオブユダ）の影響があるかもしれないし」
「手前、また設定が増えてんじゃねぇか……」
牛乳飲まねぇならくれよ、と黒い革手袋（1個20キロある設定）を嵌めた左手が伸ばされたので、ついでにこれもあげる、とデザートの蜜柑も差し出した。
「食欲ねぇのか？」
「別に。冷凍の蜜柑って苦手なんだよね」
「ったって、さっきからパンしか食ってねぇじゃねぇか。手前、いつもはもっと食い意地張ってんだろ」
昨日の帰りだって道元坂のラーメン屋で替え玉頼んで……と飲みかけのストローをこっ

ちに向けて言ってくるのを、持ってきた文庫本を開いて遮った。
　紙パックの牛乳を手に持ったまま話しかけてくる中也の口の中が乳白色に濡れているのが見えて、今朝の夢を思い出してしまったのだ。
「まーた小難しそうな本読んでんな。どうせ内容分かってねぇだろ」
「失礼だな。これはさっき図書室で見つけて、借りて来たんだよ。ちゃんと読んでる」
「理解できてんのか？」
「完璧に理解した」
「じゃあ、どういう内容か教えてくれよ」
「理解したとは言ってない」
「読めてねーじゃねぇか」
　読まねぇなら図書室に返しとけよ、と言って、中也は机の中からスマホを出し、両手で横向きに構えた。
「あ、待ってよ。僕もやる。対戦しよ」
「やだね。手前のプレイ、陰険なんだよ。午後ずっとムカムカしながら授業受けるはめになんのはごめんだわ」
「へぇ〜？　負けなきゃいい話なのに、自信ないの？」

「……あぁ？　なんだと？　言っとくが今の俺のレベルは手前より20上だ。相手にもなんねーよ」

先週からがんばって鍛えたからな、と得意げに自分のステータス画面を見せてくる。

僕があの夢を見始めたのも先週から。ゲームなんて気分じゃなかったから、中也とかなりレベル差が開いてしまっていた。暇人め。

「じゃあいいじゃない。勝てたら午後ずっと爽快な気分だよ、中也」

「……弱いやついじめてもつまんねーけど。まぁいいぜ、2秒でぶちのめしてやる」

来いよ太宰、と挑発する声に既視感を覚えながら、手に持っていた文庫本を机に置いた。

僕が編成画面をいじっているのを待つ間、中也はその本の表紙をちらっと見て、「夢判断ねぇ…俺、夢って見たことないわ」と呟いた。

＊　＊　＊

「ヨーロッパの火薬庫と呼ばれていたバルカン半島のサラエボで、オーストリアの皇太子がセルビアの青年に暗殺される事件が起きた。ドイツ、オーストリアの同盟国側と、セルビアを助けるロシア、イギリス、フランスの連合国側の間で戦争が始まった。これが、第

一次世界大戦……」

午後の授業は歴史で、教師は僕たち生徒に関心のない男であり、ただ朗読テープのように話される物語を聞いているだけで終わる、居眠りには最適の時間だった。

（世界大戦…日本はどっちに付いていたんだっけ…）

（欧州は異能力の本場だ…異能技師に異能兵器…日本に勝ち目なんて……）

外の雨が激しくなってきた。

雨粒が窓を叩く音が、コツン、コツン、と心地よい。

コツン、コツン……。

夢を見る頻度が、短くなっている気がする。

鏡面のように磨かれた床の上を、革靴の踵が一定のテンポで踏み鳴らしている。

肩に掛けただけの黒外套の袖が揺れている。廊下で会う者たちは皆、僕の姿を見るなり壁際に寄り、無言で妙な視線を向けてきた。嫉妬、憎悪だったり、羨望、敬意だったり、どれにせよ、普段の僕には向けられることのない、居心地の悪い、強い関心。

やがてすれ違う人間もまばらになり、誰もいない廊下を真っ直ぐ歩いていた。

「この奥には、使われていない執務室があってね。ある幹部のための部屋なのだけど、本人がずっと地下にいるものだから、実際は空き部屋なんだ」

まただ。夢の中の僕のヘンな癖。独り言がすごく多い。

「最低限の、机やソファーだけがあって、いつでも使えるように掃除も行き届いている。つまり、私のお気に入りの昼寝スポットというわけ」

扉を開けると、その言葉通り、広くて殺風景な部屋にソファーと小さなテーブルだけが置いてあった。どれも父さんの会社にある物よりもずっと高価そうだ。

夢の中の僕は、鼻歌を歌いながら着ていた黒外套を一人掛けソファの上に放り投げると、その斜め向かいに置かれているカウチソファにごろりと寝転がった。

「見てよこれ、昨日中華街で露天商から買ったアイマスク。ここのプリント部分に秘密があってね、これを頭に装着して寝ると、通常の人間の脳のポテンシャルを超越した演算が可能になるそうだ。宇宙から降り注ぐ全ての波長の電磁波を吸収することによってぶっくくくく」

あからさまにインチキ商品だ。ていうか説明しながら既に笑ってるじゃないか。分かってて買ってやるなんて酔狂な僕だ。

「……宇宙エーテルの無限エネルギーを自在に引き出せる接続点、と言えば分かるかな」

（……!?）

夢の中の僕は、少しの間沈黙した。

まるでそれは、僕が何か答えるのを待っているかのようだった。

「……うーん、やっぱり返事はないか。覗かれているのは分かるんだけど、無視されているのか、聞こえていないのか、私が聞き取れないのか、その判別がつかないな」

まぁいいや。と言って、夢の中の僕はその怪しいアイマスクを装着し、すぅすぅと寝息をたて始めた。両目部分に猫の肉球のような模様がプリントされている。

太宰治の身体を離れて動き回ることはできないので、僕は所在なく俯瞰だけになった視界をカメラのように動かし、部屋を見回した。

壁には絵画一つ掛けられていない。こういう部屋には意味もなく高そうな絵と壺とソファが置いてあるのがお決まりなんだと思っていたけど、本当に普段は使われていないんだな。確かに椅子とテーブルだけあれば、急に使うことになってもとりあえず座る場所と物を置く場所はあるし、無駄に物を増やしたら、掃除する人の手間が増えてかわいそうだ。

「太宰！　何処だ太宰！」

そうして、しばらくぼんやりと壁を眺めていたら、部屋の外から、カツカツと苛ついたような靴音と僕の名前を叫ぶ声が近づいて来た。

――中也の声だ。

（……嫌だなぁ。また、中也が出てくる夢なのか…）

返事をしたわけでもないのに、声の主は一発でこのドアを開け、ソファに寝そべっている僕のそばへ歩いて来る。やっぱり中也だった。身長の低さとアクセサリーのセンスが現実の中也とそっくりでウケる。ああでも、中也が帽子を被っているところは見たことないな。休日に遊ぶときも、たまにパーカーのフードを被っていたくらいだ。

「ここに居たか太宰。首領（ボス）から呼び出しがあったってのに何寝てやがる」

「やァ中也か。おはよう」

「今、外が如何いう状況か判ってんのか!?」

ソファからゆっくりと身体を起こした僕は、激しい剣幕で捲し立てる中也にまるで動じる素振りを見せず、アイマスクを外しながら、そんなに怒鳴らなくても判ってるって、と答えた。

「四大組織のうち海外組織『ストレイン』は構成員の八割が死亡。『高瀬會（たかせかい）』は頭目が暗殺されて指揮系統が瓦解。そのほかの組織も揃って死の行軍中だ」

また知らない組織の名前が出て来た。こないだの夢では『組合（ギルド）』と『死の家の鼠』っていうのが出てきて、政府側の組織が『異能特務課』で、夢の中の僕が所属しているのは、

夢の中の僕が黒い服を着ているときは『ポートマフィア』で、そうじゃないときは『武装探偵社』……他にも交戦した組織が色々あったと思うけど、多すぎて思い出せない。

中也は僕がぺらぺら話すのをじっと睨みつけている。

「これは憎しみと応報と疑心暗鬼が作り出した――血の狂騒曲」

（えっ……何今の僕の台詞！　かっこいい！）

どうして手元にメモ帳がないんだ！　忘れないように覚えておかないと。憎しみとオウホウ？と、疑心暗鬼がつくりだした血の、キョウソウキョク……明日中也の前で使おう。

僕が頭の中でさっきの台詞を反芻している間に、夢の中の僕と中也は難しい話を続けている。これを見なよ、と夢の中の僕が取り出した一枚の写真を中也と僕は同じ角度から覗き込んで、「死体か」とあっさり中也は答え、僕は咄嗟に目を背けた。こんなグロ画像、ネットでも見たことない。わざわざ探したこともないけれど。

二人の会話は次第に険悪な空気を纏っていき、その空気をまるで感じていないかのように調子良く話し続ける僕の頬を、とうとう本気で怒った中也が思い切り殴りつけた。

夢の中の僕の視界がぐわんと揺れ、僕の視界もめちゃめちゃに揺さぶられた。痛みは感じないけれど、骨にまで響いた音と、揺れた視界が合わさって、自分が殴られたかのような衝撃を受けた。

（殴られた。中也に）

（いつも、殴るポーズばっかりで、本当に殴ってきたことなんてなかったのに）

「いきなり殴るなんて酷いな。私だって人間なのだよ？」

「誰も信じねぇよ。殺されなかっただけ感謝しろ」

中也は吐き捨てるように言って、荒々しくドアを閉めて行った。

後に残された夢の中の僕は、殴られて斜めに傾いたままの体勢で、頬の痛々しい痣を手で庇うこともせず、床に落ちたグロ写真を無表情に見下ろしている。僕と同じ顔、同じ声なのに、この僕が何を考えているのか、ちっとも分からなかった。

「ふふ…酷いなぁ…。……ね、そう思わないかい？」

また話しかけられた。

本当に、これが僕なのだとして、こんな僕が出てくる夢ばかり見ている僕は、いったい何を望んでいるって言うのだろう。

図書室で借りて少し読んだ『夢判断』という本に、夢には潜在的な願望が表れると書いてあった。特に、自分にとって受け入れがたいことや、社会的に許されないような後ろ暗い欲望は、一見複雑で分かりにくい形に歪曲されて表れると。

夢の内容からその願望を読み解く方法も書いてあったのだが、ちょっと読んだだけじゃ

難しくてほとんど理解できなかった。そういえばあの本、中也の机に置いたまま自分の教室に戻って来ちゃったな。まぁいいか。僕の代わりに返しておいてくれるかも。

夢の中の僕がソファから立ち上がると、電波障害を起こしたみたいに部屋の景色にぶつんと黒い線が入った。その黒い直線の数が増えるほど、それに沿って夢は切り取られ、ばらばらに散らばってゆく。——起立、礼、ああ、ありがとうございましたー、歴史の授業が終わったんだ。目が覚めると、机の木目が人の指紋みたいで気持ち悪かった。

六時限目の数学はサボることにした。夢の中で中也に思い切り殴られるＶＲを体験したショックが抜けていなかったし、あの死体の写真……まるで意思を持った地面に食べられたみたいに奇妙に潰れた人間の画像が、頭に残って気持ち悪かった。

保健室のベッドはいつ来ても寝心地がいい。今日はまだ誰も使っていなかったのか、ピンと張られた白いシーツはさらさらに乾いていて、うつ伏せになって鼻を埋めると、石鹸の爽やかな香りがした。

今日はもう、授業が終わった後はホームルームだけだし、このまま寝続けて、クラスのみんながいなくなった頃に鞄だけ取りに戻ろうかな。

本当にいやな気分だ。僕が中也に殴られるなんて。あんな目に遭うんなら、特殊能力が使えて頭が良くてマフィアでかっこいい設定があったって、割に合わない。

死体も、ゲームの中のそれとは全然違った。見ただけで心が潰されそうな色だった。

もう、あの夢を見ませんように。楽しい夢が見れますように。

僕はそう願いながら頭からすっぽり布団を被り、目を閉じた。

……きて。起きて。

「起きて、中也。寝てちゃつまんないよ」

うう、と僕の下で眠っていた中也が薄目を開けて低く呻いた。

保健室のパイプベッドが、いつの間にかホテルの部屋にあるような大人っぽいフレームの大きなベッドに変わっている。中也は着ていたシャツを鎖骨のあたりまでたくし上げられていて、あちこち煤や血のような模様で汚れていた。

「いや、だ。おきたくねぇ」

「君の『汚濁』に付き合ったら手間賃を払ってもらうって約束、忘れてないだろ？　あんな不安定な足場で好き放題暴れた君をちゃんと捕まえて異能解除して、こうして拠点まで運んであげたんだから、相応の対価を貰いたいなァ」

「ん…なにが、対価だよ…」

気だるそうに息を吐いて、中也は膝でごつごつと僕の腰を蹴ってきた。激しい戦闘の後でまだ身体に力が入らない様子で、くそ、と忌々しげに毒づく。

「その約束は、俺の一方的な要求に手前を付き合わせたときって条件だっただろ。作戦で使うことになった場合はノーカンのはずだ。分かったら抜け。寝かせろ」

「えー、私は命令してないよ。中也が勝手に使ったんじゃない」

「あの状況で他の選択肢はなかった。ア、手前が一人で敵地に…っン、乗り込んで、俺を一人で来させ…、た時点で、全部計算ずくだったんだろ。違うか？」

「……あーあ。可愛くないんだか、全然可愛くないんだか分かんないね中也は」

「あぁ？　誰が可愛いって？」

「可愛いは選択肢に入れてません～。自意識過剰なんじゃない？」

てめぇ死なすさっさと出てけと暴言を吐くが、その声はさっき教室で居眠りしていたときに見た夢よりも迫力がない。形の良い小さな頭が揺さぶられて、オレンジ色の髪が羽根枕の上にぱさぱさ広がる。はやく、しね、と罵る声の語尾が甘く上ずっている。

猫みたい。聴いたことのないその声に、どくんどくんと心臓がうるさく鳴った。身体中に血が巡って背中が熱い。腰から下は熱いだけじゃなくてお湯に浸かっているみたいに気

持ちがよくて、あれ、そういえば「抜け」ってなに？　何を…、と視線を下げた。

「ウワーーーーッッッ！」

「おわぁ！　な、なんだびっくりさせんなよ！」

「……中也？」

大声をあげて飛び起きた時、まず目に映ったものは保健室のベッドを囲っている薄桃色のカーテンと、隣に立ってこちらを怪訝そうにじろじろ見ている中也の顔だった。

「手前、貧血だって？　ったく、だからちゃんと食えっつったんだ」

ほらよ、手前の荷物。と言って中也は肩から二つ提げていた紺のスクールバッグをベッド脇の床頭台にどさっと置いた。僕はそれと中也とを交互に見比べて、自分の腰に掛かっている布団の端をきゅっと握りしめながら、「今日何か約束してたっけ？」と努めて平静に尋ねた。

「……してねぇけど。具合悪いんだろ。途中まで送ってってやるよ」

どうせ帰り道は一緒だしな、と言いながら、自分でもらしくないことを言っている自覚があるのか、僕から視線を外しておもむろにスマホの画面を弄り出した。

その首に巻かれている黒いチョーカーを、盗み見るようにちらちらと見てしまう。夢の

中の中也も同じものを着けていた。いや、もう少し上等な物のようだったけど。

さっきまで、僕の下で、ろくに身体も動かせずに、眉間にしわを寄せて耐えていた。ゆるく流れる前髪は汗でおでこに貼り付いて、下の瞼は病人のように血色が悪いのに、頬は揺さぶられる度に薔薇色に染まり、うすく開いた唇は濡れてつやつや光っていた。その唇が、力なく「しね」なんて言ったのだ。

「僕……あ、そうだ、図書室の本、返してない……」

中也がこっちを見てないうちに、ぺちゃんこの羽毛布団を真ん中に寄せて、膝の間のものを覆い隠した。自分の制服のズボンに起こっている変化をこの幼馴染に見られたら、冗談じゃなく死んでしまうと思った。

「ああ、あれなら返却しといたぜ」

なんでこんなときに限って気が利いてるんだよ！　思わずキレそうになったが、親切でしてくれたんだろうに、さすがに逆切れするのは理不尽である。言ったらきっとまたいつもの喧嘩に発展するだろう。まずぎゃあぎゃあ口で言い合って、そのうち手が出て、布団を勢い良く捲られて、そしたらアウト。「授業サボってどんな夢見てたんだよ変態」とか言われて、今まで中也絡みで起こった嫌な出来事歴代ナンバーワンを更新しちゃう。それだけは駄目だ絶対に。

「……分かった。森先生に、ひとこと言ってから帰ることになってるから。だから、先に待っててよ。中也が校庭百周するまでには行くから」

「なんで俺を走らせんだ！　……分かったよ、さっさとしろよな」

中也は養護教諭の森のことがちょっと苦手なので（僕も苦手だが）、彼の名前を出したら嫌そうな顔をして大人しく保健室から出て行ってくれた。

廊下を歩く中也の足音が遠ざかって、やっと胸を撫で下ろす。

あぶないところだった。僕はおそるおそる布団を捲り、いまだ治まってくれる気配のないそれを見下ろし、重い溜息を吐いた。

最悪だ。死にたい。でも今は、外で待っている中也に不自然に思われないうちに、トイレに行ってこれをどうにかしてこなくちゃならない。

中也が持ってきてくれた鞄を開けたら、財布とペンケースと『黒の言霊集（ポエム）作品ノート』だけ入っていた。僕が教科書類は全部学校に置きっぱなしにしていることを知っているのだ。クラスは別だけど、小学生時代はお互いを『相棒』と呼び合っていた時期もあったくらい仲が良かったから、なんだかんだ中也と遊ぶのが一番気楽だったりする。まぁ、今思えば中也が相棒だなんて、黒歴史でしかないんだけど。

保健室から近い、視聴覚室や家庭科室のそばのトイレは、文化部の生徒が使いに来るか

もしれないので避けた。空き教室の奥にあるあまり使われていないトイレの個室にこもって、廊下に誰かがいないかしばらく耳を澄ませてから、かちゃかちゃとベルトを外した。

（これは、僕のせいじゃない）

夢の中の僕が、勃ってたから。だからこっちの僕の身体まで引きずられただけであって、夢の中で中也に殴られて、本当に殴られたような衝撃を受けたのとつまりこれは同じ現象なんだ。中也にあんなことしてたのも、それで興奮してたのも僕じゃない。今だって、迷惑な生理現象を治めるために仕方なくしているだけで、この手も腰も頭も、ＡＵＴＯなんだよ。僕の意思じゃない。どのひとつとして。

「――――っくぅ、は……」

前屈みの体勢になって、声を出さないよう唇を噛み、腰に溜まっていく一方の不愉快な熱を逃がそうと盛んに手を動かす。こういうことをするときに、最後に使ったオネエサンの映像はどんなんだったっけ？　必死に脳内で再生しようと頭を振っても、出てくるのはついさっきまで見ていた夢と、その前に見たどろっとした白い体液を口の端から垂らしていた中也の、ああ、違う違う！　中也じゃなくて美人のオネエサンの柔らかい唇とおっぱいと「あ、あぁ……」駄目だどうしようこのままじゃ、中也の髪の匂い、ぐずぐずに溶けた青い瞳、普段はきゃんきゃんうるさいばかりの声があんなに高くトんで――……っ

……、僕は、肩で息をしながら、くしゃくしゃに丸めたトイレットペーパーを下に添えて後始末をした。出す前と出した後で、嘘みたいに形が違う。

自分の手の平を開くと、べったりした生温い体液で、指と指の間まで汚れていた。

「最低だ、僕って……」

僕のせいじゃないのに。でも、気分はどん底に暗かった。

＊　＊　＊

水道で何度も手を洗って、赤くなっていた顔も洗って、鞄は持っているのにわざわざ教室に一度戻り、体操着バッグから制汗スプレーを出して咳き込むほど振りかけた。やっていることがまるで人を殺した後の犯人みたいだと思って、げんなりした。

中也は、煉瓦造りの校門に背中を預け、ゲームをしながら待っていた。

「……おまたせ」

「おっせ。何やってたんだよ」

「何って、だから森さんに捕まっちゃって」

「具合悪いんだろ。早く帰ろうぜ」

「うん……」

いつもは「頭が痛い」とか「おなかが痛い」とか言っても「保健室行けよ」と言う程度でこんなに心配したりしないのに、よっぽど今の僕は様子がおかしいのだろうか。

いつも通りにしてないと、余計な詮索をされてしまうかもしれない。そう思った僕は、通学路を中也と並んで歩き出しながら、わざと手であくびを押さえる仕草をした。

「寝たら治った。昨日新しいゲーム落としてさ、それで寝不足だったんだよね」

「なんだよ心配させやがって。つうかそれなんてやつ？　俺にもやらせろよ」

「え？　えーと、なんだったかな…海外ので…パソコンでやるやつだから…」

「じゃあ帰りおまえんち寄っていい？」

「え」

「やっぱり具合悪いんだったら、やめとくけど」

「別に…、いいけど」

いやいやいや僕の馬鹿！　なんで別にいいなんて言っちゃったんだ？　さっきから中也の顔をまともに見られなくて、一秒も早く物理的に離れたいっていうのに、中也は僕の体調を心配していたのなんてすっかり忘れた風で、ありもしない新作ゲームへの期待に青い目をきらきら輝かせている。

中也の家には、中也本人もよく知らない複雑な事情があって、まだ僕が赤ん坊のころに近所に引っ越してきたときからずっと、血の繋がりのない親戚の女性と二人暮らしをしている。関係は極めて良好なようだけど、自分の面倒を見てくれているその人に迷惑をかけたくないという思いがあるのか、昔から中也は本当に必要最低限の物しか買ってもらおうとしない。「早く高校生になってバイトして稼ぎてぇ」と口癖のように言っている。

だから、1個20キロの特注ウェイトなんて話は嘘だし、いつも一緒に遊んでいるゲームは無課金でもそこそこいいとこまでいけることだけが売りの、とっくに流行りを過ぎてユーザー離れを起こしているFPS。中也が僕の家に来たがる理由はいつも、新しいゲームか漫画なのだ。そのことと、僕が親にねだる玩具の大半がゲームと漫画であることには、特に因果関係はない。

「お帰りなさい、治ぼっちゃん」

「ただいま」

結局、うまいこと発言を撤回することができないまま、自分の家まで中也を連れて来てしまった。玄関を開けると、白い割烹着のしわを伸ばしながら、家政婦の慶子がパタパタとスリッパの踵を鳴らして出迎えに来てくれた。

「お邪魔してます」
僕の後ろから入って来た中也が、よそ行きの声を出した。
「まぁ、中原くんいらっしゃい。あとでお部屋にお菓子を持って行きますね」
「いいよ、慶子さん。中也なんかにわざわざ」
このやり取りも毎度のことなので、中也は「なんかって何だよ」と突っかかってくることもせず、にこにことキモい愛想笑いを浮かべたまま、僕の後ろを付いて来た。
どうしよう。新しいゲームなんて、寝不足の原因を聞かれないための作り話だったのに。
二階への階段を上って、自分の部屋のドアを開けると、中也は途端に勝手知ったるという態度でずかずかと上がり込み、この間通販で召喚したばかりの人を駄目にする魔寝具（ソファ）にどっかりと座ってしまった。
「……何だよ？　早くやろうぜ」
「え、何を」
何ってゲームだよ、と言ってシャツの胸元を暑そうに指ではためかせる。
僕の部屋の、僕のベッドのそばに中也がいる。そんなことは今まで何度もあったことだし、何なら二人ともまだおむつを履いていた歳から同じベッドに転がされていたこともあったと慶子さんから聞いた。今さら意識する方がどうかしている。というか中也は男だ。

意識するとかしないとか以前の問題だ。僕は男を好きになったことはない。女の子を好きになったこともまだ、ないけれど。

　中也と目を合わせないようにして、学習机に向かい、パソコンの電源を入れた。漆黒の夜に浮かぶ赤い月と堕天使のかっこいい壁紙が目に入った中也が「うへぇ」と言う。それは無視して、机の上に置いていたエアコンのリモコンを操作し、部屋に涼しい風を入れる。まだ六月半ばだというのに、黙って座っているだけで背中が汗ばむ暑さだった。

「おー、涼しい」

「ちょっと待ってて。えーと、あれ、間違えて消しちゃったかな……」

「漫画読んでていいか？」

「いいよ」

　我ながら白々しい口調で言った言葉だったが、中也は怪しんだ様子もなく、僕に背を向ける格好で本棚の漫画本を物色し始めた。

　どうでもいいことだけど、どれだけ付き合いが長くても、僕の物に触るときには必ず一声かけてからにするところは、全面的にうざい中也の中でも、まぁまぁ長所といえるとこなんじゃないかって思っている。どうでもいいことだけど。

　いつものサイトにログインし、デイリーのダウンロードランキング一位のゲームを何も

考えずにダウンロードした。ロードの時間中に、攻略サイトを探して操作方法にざっと目を通す。昨日夜中まで遊んでいたことになっているのだから、操作できないと不自然だ。

「格ゲーか、なんか久々だな」

ダウンロードがやっと終わり、ゲームのタイトル画面が表示されたところで、中也が後ろから僕に声をかけて、僕が座っている木製の椅子の端に腰を下ろし、強引に一つの椅子に座ろうとしてきた。肩が弾みでとんと触れる。

「ちょ、ちょっと何、狭い」

「しょうがねぇだろ、もうちょっとそっち詰めろよ」

ぐいぐいと肩を肩で押され、せっかくエアコンの冷気で心地よくなっていた腕にも彼の腕がぴたりとくっついて、人の体温に身体が驚いた。その隙に僕の椅子は半分も領域侵犯されて、片足がお互いに椅子の外側へ出た状態でコントローラーを握った。中也は本棚から取り出していた一冊の漫画本を閉じて、机に置く。

「手前は本当にこういうの好きな」

「え？　異世界転生ものってこと？　そんなに持ってないけど」

「いや、チート主人公っての？　何でもありの能力持ちで最強って設定の」

「中也の部屋の本棚だって似たようなものじゃん」

往年の名作的な格闘漫画ばかりブックオフでちまちま買い集めているのを知っている。だいたい主人公が強い奴を倒して、強い奴より強い奴を倒して、強い奴より強い奴より強い奴を倒していく話で、読んで面白いと思ったものが一冊もない。

「俺はこういう余裕ぶったのはちょっとな。絶対勝てなそうな奴に拳で勝つから面白いんじゃねぇか、漫画ってのは」

「脳筋。選ぶキャラも相変わらずだね」

「手前こそやっぱり変な女キャラを選ぶんだな。絶対弱いぜ、そいつ」

僕の選んだゴスロリ衣装の女の子のキャラを見て中也は鼻で笑った。小学生のころによく遊んだ格ゲーではいつも僕はセーラー服で金棒を振り回す女の子を、中也はカンフー少年を選んで、お互いの技のコマンドも間合いも弱点も全部覚えているものだから、なかなか勝負がつかなくて、相手のほんの一瞬の隙を突くようなバトルばかりしていた。

「……ねぇ、その漫画みたいな世界に、行けたら中也は何がしたい？」

「あ？　そんなの手前、あのノートにいっぱい書いてんだろ？」

「僕のことじゃなくて、中也の話」

最初の何戦かは、色んなコマンドをがちゃがちゃ試してふんふんなるほどね、と独り言を言っていた中也は、自分が選んだ筋骨隆々の忍者キャラの両腕をぶんぶんと上下させて、

よしこっから本気な、とサムい挑発を繰り出した。
「俺だったら、そうだなぁ…素手でドラゴンとか倒してぇな」
「何言ってんの？」
「手前が聞いたんだろうが、手前が！　そんなだから友達できねぇんだよ！」
「中也に言われたくない。あー、デカくて邪魔！　忍ぶ気ないでしょこの忍者！」
「手前こそ傘でちまちま削ってくんなようざってぇ！　技使え！」
お互い操作に慣れてから何戦かしたが、小技が決まる度にいちいち画面に大きく文字が流れたりキャラが喋ったりして流れを遮られるのが邪魔くさく、キャラの声も聞き取りづらくて、中也も同じことを思ったのか、「これ、いまいちじゃね？」と首を傾げた。
その時、彼の横髪のひとすくいが、ほんのかすかに僕の頬を撫でた。
僕は反射的に首を動かして、そしたら触れ合っていた肩がずれて、中也も僕の方を向いた。僕の右手のコントローラーと、中也の左手のコントローラーが、こつんとぶつかって、青い目が不思議そうに揺れる。「……どした？」とやたら優しい声を出した唇が動くのを見て、僕はその、彼の一瞬の隙につけこんだ。
「…っん、な、むぐっ…」
やり方なんて知らない。だって夢で見たことがあるだけだった。驚いて何か言おうと開

かれた中也の口を、両手で頬を固定してもう一度塞いだ。怖かった。とんでもないことをしてしまったと頭の片隅では思っていても、唇から伝わる現実感のとりこになって、少しでもこの時間が長く続けばいいと思っていた。

取っ組み合いの喧嘩をしたことも何度もあったけど、耳たぶに触れたのは初めてだった。くにゃりと指で折り目をつけたら、んん、と彼の口の中で何かが暴れた気配がした。僅かに開いたその唇を舐めて、舌を入れて確かめようとした瞬間、どんと突き飛ばされた。

「う、わわっ！」

二人で一つの椅子に座っていたから、僕が傾いたら中也もバランスを崩してしまい、二人揃ってみっともなく床に転げ落ちた。コントローラーも二個ばらばらに落っこちて、ゲーム画面からは、どっちが勝ったか負けたか全然聞き取れない声がしていた。無料とはいえ本当にクソゲーだな。あまりに酷い出来で話題になったのかもしれない。

「……てめ、まじで、ふざけんなよ……」

中也は手の甲でごしごしと自分の唇を拭いながら、僕に文句を言おうとしていたが、うまく言葉が出てこないといった様子で、くそ、しね、と舌打ちのように零し、自分の鞄を引っ掴んでばたばたと部屋を飛び出して行った。廊下で鉢合わせたらしい慶子さんの驚いた声が聴こえたが、僕は追いかけなかった。

また喧嘩したんですか、と困った顔で慶子さんが二人分の紅茶とクッキーが載ったお盆を机の上に置く。うん、と答えると、中也の分は下げてくれた。

中也が僕の本棚から出した本を元に戻さずに帰ったのは、このときが初めてだった。夕食はいらないと言った。机の上のクッキーにも口を付ける気になれなかった。ラインのトーク画面をしばらく見つめて、スタンプをいくつか物色したが、結局何も送らず、中也からも何も言って来なかった。死ね、ってお決まりの台詞が来るかと思っていたのに。

（……いや、中也は、僕に死ねなんて言わない）

ぶっとばすとか、ぶちのめすとか、そういう暑苦しい台詞はよく聞かされるけど、しね、って言われたのはさっきのが初めてだ。夢の中の中也は相槌の代わりなのかと思うくらい頻繁に言うから、現実の中也に言われても驚かなかった。

今までずっと言わなかった言葉で罵倒するくらい、僕とのキスが嫌だったのかな。

キス。キスしてしまった。僕の方から中也に。

「あああああ!!　死にたい死にたい死にたい!!」

靴下だけ足の指でぱっぱと床に脱ぎ捨てて、今にも溢れそうな何かから逃れるようにしてベッドに潜り、アルマジロみたいに丸まって必死に呼吸を整える。

どうしてあんなことしちゃったんだ！

彼と目が合った瞬間、身体が勝手に動いていた。

中也はすごく狼狽えて、唇が切れそうなくらい手の甲で拭ってた。

その光景を思い出し、蒸し暑い布団の中で、僕は自分の右手の甲を唇に当ててみる。

全然違う。さっき触れていたものは、もっと、ずっと柔らかかった。

耳をいじったら、びくりと肩が震えて、唇がちょっと開いたのが面白かった。耳のとがったところを触られて嫌がる猫みたいなリアクションをしてた。いつも大口ばかり叩くくせに、実際その口は僕の口で簡単に覆ってしまえるくらい小さくて、あの口の中に入ったら、どんな感触がしたんだろうか。

夢の中では、僕にされるがまま、あんなあられもない姿を見せてくれたのに。現実では、ひょっとしたらもうこれで絶交ってことになってしまうのかな。

そうなっちゃったら、もう昼休みに屋上で話す相手がいなくなる。

とっくに飽きていたのにレベリングし続けたゲームで対戦する相手もいなくなる。

僕がしでかしたことなのだから、僕から弁明しないといけないのだろうと思いながら、何を言えばいいのか、何か言う必要があるのか、言ったところで今まで通りの関係でいてくれるのかどうかも、何も分からなかった。

もういいや。明日の僕に考えてもらうことにして、今日は寝てしまおう。

疲れた、と自然に口から出ていた。僕は制服のズボンを脱いでシャツ一枚になり、ネクタイも解いて無造作に枕の下に突っ込んだ。

変な夢ひとつに振り回されて、現実の僕は夢の中の僕と違って、なんてダサいんだろう。いい考えも浮かばないし、特別な能力もない。現実世界はクソゲーすぎる。

目を閉じたら、すぐに眠気が襲ってきた。

ごちゃついていた頭の中が、急にクリアに冴え渡っていく。

今日の授業の内容も、中也と話した内容も、ひどい出来だった格闘ゲームの必勝法も、父さんの会社の株価も、見たことあるものもないものも全部、注射針を脳に直接刺されたみたいに流れ込んでくる。その情報の粒が、頭の中で砂嵐のように流れていた。

（なんだこれ……僕、本当に疲れてるんだな……）

中也、なんて言って謝ったら許してくれるかな。

目を閉じたままそんなことを考えていたら、砂嵐の向こう側に中也の姿が見えた。インターネットでお目当ての情報を検索したときのような感覚だった。知らない部屋のキッチンと中也の雰囲気から、また例の夢だということはすぐに分かったけれど、自動的に見せられてきた今までとは違い、無数の夢の中から自らこの夢にアクセスしたような、自分の

意思の存在を感じていた。
「おい、太宰。さっきから鳴ってんぞ」
フライパンの中のブロッコリーを転がしていた菜箸をひょいと持ち上げ、中也は僕がいる方向に向かってそれの先端を軽く振った。
「……ああ、ごめんごめん。仕事のやつ切っておくの忘れてた」
僕の視界の真下から、もう一人の僕が登場した。背が随分伸びている。服装からして、『武装探偵社』に所属している22歳の僕だ。
「仕事なら出ろよ。先に食ってるから」
「ええー、そこは待っててよ。すぐに済ませてくるからさ」
夢の中の僕はそう言って中也の細い腰を片手で抱き、一文字に結ばれた薄い唇をあっという間に奪った。中也は抵抗の素振りを見せずにキスを受け入れ、料理の手も休めてそれに応じる。ちゃっかりコンロの火は止められていた。
「は……ぁ、さっさと、片づけて来い」
「ふふ。はぁい」
唇が離れるときに、二人の口の中に真っ赤な舌が覗いていた。名残惜し気に歯の先端をなぞっていったその舌の動きに、もやもやと胸を黒い雲が覆っていく。

（ずるい。夢の中の僕は、こんなに簡単に）

「――何がずるいって？」

ベランダに出て窓を閉めた後、夢の中の僕は煙草を一本指に挟んで、もう片方の手で携帯電話を耳に当て、何も聞こえてこない受話器に向けてそう尋ねた。

（また独り言……話しかけられてるみたいだ……）

「そうだよ。何度も会話を試したのに、声が聞けたのは今回が初めてだ」

（え……まさか、僕に話しかけてるの？）

「他に誰がいるのさ。太宰治（わたし）だろ？　君も」

（会話が成立してる！　なんで!?　やだこわい！）

「落ち着いてよ（少し話そう）」

（こいつ直接脳内に……！）

「なんか調子狂うなぁ。他の可能性には、こういう私もいるのだね」

平和そうで何よりだよ、と再び携帯電話に向かって話す振りを続ける。

（なんで電話してるフリなんてするの？）

「え？　何だいその質問」

夢の中の僕は少し困惑した表情で、数秒の間、黙って何かを考えていたが、不意に「あ

あ、そういうことか」と勝手に答えを出して呟いた。
「君って、馬鹿なんだ」
（は!?　なんでそんなこと言われなくちゃならないの!?）
「考えなくても分かるようなことをわざわざ聞いてきたから、私の反応から何か読み取ろうとしているか、或いはその一手から私の行動を目的の道筋に誘導しようとしているのか、或いは…と何通りか考えたのだけれど、どれも合理的な方法とは言い難いし、だとすれば、残る可能性は『本当に分からなくて聞いている』しかない。ちなみに、答えは中也に君の存在を知られたくないからだよ」
　そして、あんまり長く話している時間もない。と言って、夢の中の僕の眼球がきょろりと動き、キッチンでまだ料理を続けている中也にピントを合わせた。彼はすぐに視線を察知し、こちらに顔を向けた。夢の中の僕が火の点いていない煙草を持ったままの手をひらりと振ると、中指を立てて返し、グラスにワインを注いでごくごくと飲み始める。
「あーあ、拗ねちゃった。手短に話そうか」
　夢の中の僕は、再び室内に背を向け、高層マンションから見える夜景を眺めながら、「君は、エヴェレットの多世界解釈は知ってる?」と僕に尋ねた。知らない、と答えようとしたら、「知らないか」と先に言われたのでムッとした。

「量子力学の話をしても理解できないだろうから、この理論をアレンジしたSF小説を例に取って説明してあげよう。いいかい、この世界で起こっている事象は、常に複数の選択肢で分岐していて、分岐点から先が膨大なレイヤで同時間軸に並行して存在している。しかし、その膨大なレイヤのうちの一枚を自分が観測した時点で、他のレイヤは崩壊する」

（パラレルワールドの話？）

「似ているけれど…決定的な違いがある。存在している世界を観測できるんじゃない。観測したからその世界が存在し、一つの世界を観測した時点で、それまでは、あるかもしれないし、ないかもしれなかった他の無数の世界は、消失し、観測された一つの世界に収束される。そういう考え方だよ」

（それは変じゃないの？　一つの世界だけ残っても、その世界でも毎日色んな選択肢が出てくるんだから、分岐の数だけまた別の世界は存在するんじゃないの？）

「『存在』はできないよ。それらの世界はまた、『あるかもしれないし、ないかもしれない』状態になるんだ。存在を許されるのは、観測された世界だけ」

（許されるって誰に？　誰が世界を観測しているのさ？）

「しているじゃないか、今」

（……僕？）

「正確には、『僕たち』だね。さっき話したのは、多世界解釈のただのSF小説的説明。本題は、私たち『観測者（スティグマ）』が最終的に残すべき世界の在り様だよ。それを話し合うために、私たちは13人目の太宰治を捜していたんだ。心配したよ。5人目のときみたいに、一方的に接続を切って、可能世界を閉じようとするんじゃないかってね」

（……ちょっとついていけなくなってきたんだけど）

「人は、君がさっき言ったような『パラレルワールド』を想像するとき、分岐点の別分岐を進んだ先にある直近の結果と、さらにそのずっと先にある大枠の結果しか考えない。それは妄想の切り抜きでしかなく、観測ではない。分岐した瞬間から世界の結末までの一部始終を正確にシミュレートして初めて、その世界は存在できる」

（そんなの…大長編の小説になっちゃうじゃん）

「……そうだね。でさ、普通はね、ああ、私たちの中での普通は、こうやって接続できた時点で、互いの知識と記憶を同期できるのだけど……君の脳、容量ちっちゃくて私たちの記憶入らないみたい。あはは。もっと日頃から頭使いなよ」

（馬鹿にされてるってことは分かる…ねぇ、なんでかな、自分で見ている夢なのに、夢の中の自分のこと好きになれないんだ。中也も怖いし）

「怖い？　中也が？　あっはっは」

夢の中の僕はさっきから独りで笑っているけれど、微塵も愉快な気持ちでいないことが分かるので、ひたすら薄気味悪く感じる。考えていることは相変わらず分からないのだが、感情の波が伝わってくるようになっていた。ひょっとしたらこれが、同期するということなんだろうか。

「そっちの中也も強い？　うちのゴリラみたいに」

（ゴリラ？　いや、ちっちゃいし、別に強くない…強いって設定みたいだけど）

「設定って何？　うーん、よく分かんないな…ねぇ、もう少し繋いでいい？」

（繋ぐって、記憶を？　僕の頭には入らないんじゃなかったの）

「面白いことだけに絞ってあげるよ。理解できたら、異能力も使えるようになる」

（えっ!?　ほんと!?）

「ほんとほんと。感覚も共有できるよ。私の身体も動かして構わない。中也の料理はおいしいよ、作者の見かけによらず。せっかく来てくれたんだし、次にまた同じ夢を見れるとは限らないし、食べてから帰ったら？」

それは別にいらない、と僕が答えると同時に、夢の中の僕は、ずっとただ指に挟んでいただけの煙草を口に咥えてライターで火を点け、深く煙を吸い込んだ。

「――――っっっ!!　ごほっ！ごほっ！」

学校からの帰り、渋谷で雑居ビルの火災現場を野次馬したときのような、埃っぽい煙が気管に貼り付いた。咳き込んでも喉に違和感が残ったままで、今すぐ何かを飲みたい、と思った時、足が勝手にリビングの方へ踏み出していた。

（あ、待ってよ。吸い殻落としてる。そこの灰皿に入れてって）

「灰皿？　……えっ！　待って！　どうして僕がこっちなの!?」

（同期することに君が興味を持ってくれたから）

そんなことより灰皿だってば。私が中也に怒られちゃうんだから。ほら、いまあなたの心に直接語りかけています……、と、おちゃらけた口調で頭の中に言葉を送り込んでくる。僕はまだ火の燻っていた吸殻を拾って、四角い箱型の灰皿の上でもみ消して捨てた。

（設定っていうのも理解したよ。随分馬鹿らし…面白いことをしてるんだね）

「夢の中の僕みたいに、僕にも特殊な能力があったら、空想したりしないよ」

（それもそうか。だけどね、力を持っているということは、その力の使い道を選択しないといけないということだ。そう楽でもないんだよ）

「何もないよりはマシでしょ。贅沢な悩みだと思う」

リビングに戻ると、すっかりテーブルに並べられた料理の前で、中也は二人掛けのソファに腰掛け、僕に一瞥もくれずに、もくもくとワインを飲み干していた。

（待たせてごめんね、って言って）

「えっ…あ、ご、…ごめん。待たせて……」

中也の視線の先には、大画面の液晶テレビがあり、南極の氷山が不意に崩れ落ちる映像が流れている。無音で、映画なのかドキュメンタリーなのかよく分からない。

彼はその映像を見つめながら、チッと舌打ちをして、自分の隣の座面を手で叩いた。

「え、座れってこと……？」

「他に何があんだよ。突っ立ったままで食うのか？」

中也と会話した。それは新鮮な驚きだった。

夢の中の中也はいつも僕に攻撃的で、本当に手加減なしの暴力を振るってくるときもあったし、それでいて夢の中の僕とやらしいことをしていたりとワケがわからないからちょっと苦手だ。夢の中の僕も僕のことを小馬鹿にしてくるし、異能力は欲しいし使ってみたいけど、急に夢の中の僕のように振る舞えと言われたって無茶だ。

（ほら早く座ってあげなよ）

頭の中から夢の中の僕に急かされる。さっきまでは僕も好き勝手にしゃべっていられたのに、こっちの立場になったら、声が出てしまうから文句の一つ一つも言えない。

「ま、待たせてごめん……ね」

「そりゃさっきも聞いたよ。何だ、やっぱ仕事の電話じゃなかったのか？」

失礼しまーす…と、ソファの端に腰を下ろした僕と中也の間のパーソナルスペースは、しかし中也によって一瞬で詰められてしまった。

太腿の上にそっと手を置かれ、横髪を一房耳に掛けられた。開けた視界いっぱいに中也の何かかわるいことを企んでいるような顔があって、それは口を開けば息がかかってしまうのではないかと思うほど近かった。

「いい男だなァ、本命が料理をしている間にどこぞの女を口でたぶらかして」

「へ、あ、あの、そういうわけでは」

（あはははは！　なにゴリラ相手に緊張してるの。初めて風俗に来た客みたい）

でもそういうの、中也の趣味だよ。頭の中で、本当に愉快そうにひぃひぃ笑っている声が響き、それに気を取られている間に、ひんやりした手の平が僕の頬を撫でていた。

殴られるんじゃないかって身構えたけれど、一向に拳が飛んでくることはなく、中也は自分の指の一本一本に僕の顔のかたちを覚えさせるかのように触れて、生え際、眉、目尻、頬骨、鼻筋、そして唇に触れると、ふぅ、と満足げに溜息を吐いた。

「今更、手前の浮気一つでごちゃごちゃ言ったりしねぇよ。それを気まずいと思うような可愛げが手前にあったことに驚いてるだけだ」

ちゅ、と唇に唇が触れて、すぐに離れたので、一瞬、何が起こったのか分からなかった。太腿に触れていた手に誘導されるまま足をソファに乗り上げて、行儀悪く寝そべった僕の上に重なり合わさるように中也が身体を滑らせる。

「どうせ演技なんだろうが……そういうの、嫌いじゃねぇ」

「あ、わ、ちが、中也、ぼくは」

「僕ぅ？」

そこまでやるか、と何か勘違いし続けている中也はゲラゲラ笑う。

「……懐かしいな。俺も手前も、まだ何も知らずにいたころだ」

中也はもう少し何か言いかけて、しかし、やはり口をつぐむと、言葉の代わりにするようにもう一度僕に口付けた。

僕のいる現実ではかたくなに閉ざされていた口の中のあかい色。それが今は、向こうから僕を迎えに来て、僕の唇をノックし、引きずり出してくれる。中也の唇が僕の唾液を吸って、中也の舌が僕の歯列の上を歩く。ぞわぞわと背中に何かが生えてきそうな感じがする。

なんにもできずにいた僕の舌が見つかって、別の舌でにゅるにゅるとねぶられたとき、たまらなくなって彼の両肩を強い力で掴んでいた。口の中で嬉しそうに小さく喘いだ声が聞こえて、脳みそが茹だっていく。

中也が。中也が僕のキスで感じてる。口のなか、きもちいい。
（あーあ。これって君の方こそ浮気だよ、中也）
身体を勝手に明け渡してきたのはそっちじゃないか。中也だって喜んでる。
（そりゃそうさ。中也は私が大好きなんだもの）
（世界大戦の話はどこかで聞いてきたかい？　最初にあれと同じことが起きた。一人目の私は、新世代の双黒を育て、運命に抗ったが、戦火に投じられた異能兵器によって世界は滅んだ。私も、中也も死んだ）
（別の世界では、戦争を阻止した。けれど伝染病が蔓延した。私は死に、残された中也は最後まで横浜の街のために奔走したが、とうとう救うことはできなかった）
（また別の世界では、中也が死んだ。私は周囲の人間たちから乞われるまま策を出し続け、しかし戦力がどうしても足りなかった）
（私たちは、ある結論に達した。私という頭脳と、中也の戦力、その両方が揃って初めて、世界の崩壊を防げると。私が中也以外の戦力を頼ることも、中也が私以外の頭脳を頼ることもしてはいけない。互いが互いを武器として最大限使い倒したときのみ、世界を救い、それを見届けた後で死ぬことができると）
何言ってるのかわかんないよ。今それどころじゃないんだ。

「だざい……もっと、シたい……」
「う、うん…僕も…」
（ここは、やがて天変地異で全てが海の底に沈む世界）
（――その世界を、消えゆくはずだった命を全て救ったとしたら、…ふふ、ねぇ、歴史上、それ以上の「善人」は、後にも先にも現れないと思わないかい？）
「なに…わかんない…おもわない……」
「え…？　そんな意地悪いうなよ、飯なら終わってから温めるから…なぁ」
やる気出させてやろうか、と言って、中也は見せつけるようにべっと舌を出して自分の唇を舐めてから、ずりずりと身体の位置を下げて、僕のズボンのベルトに手をかけた。
「えっ、なに、駄目だよ中也、やめて」
「こんなに期待させて何言ってんだよ。口でされるの好きなくせに」
「や、ほんとに、だめってば、汚な、あっ、あ、～～っ、うぁ…ッ」
目の奥が、じんっと沁みた。
今まで十四年間生きてきて、これ以上気持ちいいことはないんじゃないかってことをさっきキスで経験したばかりなのに、もうそれ以上を知ってしまった。頭が真っ白になる。気持ちいい。気持ちいい。言われるままに柔らかい髪を掴んだらもう、自分はただの一匹

の動物で、中也に食べられてしまった中也の一部のように思え、思え、て、
「中也……はぁ、もっと、僕に、教えてよ……」
「……ああ。いいよ」

「治ぼっちゃん、もうそろそろお仕度しませんと」
「ん……ああ、わかったよ。ええと……着替えてから行く」
「朝食はできていますからね」
家政婦がドアを開けて出て行くとき、確かに焼きたてのパンの良い香りが階下から漂ってきた。ディスプレイが点いたままのパソコンの前に座って一通りのニュースに目を通してから、床に落ちていたズボンを履き、その隣に同じく落ちていた鞄を拾って、一階の洗面台で顔を洗う。ついでに簡単にシャツのしわと髪の寝ぐせを直して、そのまま玄関へ行き、揃えて置かれていたローファーを履いた。
「あ、あらあら、朝食は食べて行かないんですか？」
「うん。今日はもう行くよ」
「中原くんと仲直りできるといいですね」

「うん。ありがとう」

校庭では、運動部が朝練でストレッチをしていた。その横を通り過ぎて、下駄箱で少し考え込んでいたら、どん、と後ろから誰かに鞄をぶつけられた。

「……中也」

「……なんでこんな朝早くに学校来てんだよ、帰宅部の手前が」

「中也こそ」

「俺は、毎朝屋上でトレーニングしてんだよ。朝なら誰にも邪魔されねぇしな」

「ふぅん。じゃあ、リクエストに応えて邪魔しに行くね」

「来るなっつってんだよ！　日本語通じねぇのか手前は」

「そんなに喚かないでよ。ちゃんと昨日の説明、するからさ」

「……」

ぐぅ、と唇を引き結んで中也は黙った。わざわざ鞄をぶつけて存在をアピールしてきたのだから、説明してほしがっていることは明白なのに、素直じゃないんだな。

二人で屋上へ出ると、朝の心地良い風がひゅうと吹いた。冷たくて、葉っぱの匂いがする。

今は六月だから、昼間に来ればここは直射日光と湿度で相当蒸し暑いだろう。中也は前髪を指で気にしながら、給水塔のあるもう一段高い場所への梯子を登り出した。

そして、給水塔を背凭れにしてセメントの床の上に座り、股ぐらで斜めに伸びている自分の影をじぃと見下ろしていた。

「手前、ネクタイ忘れてんぞ」

「置いてきたんだよ。ね、トレーニングするんじゃなかったの」

「話があるんじゃなかったのかよ。そっちが先だ」

「…うーん、横で腹筋しながら聞いてもらっても構わないと思っていたのだけど、考えてみたら確かに、そんな暑苦しい姿見せられると告白する勇気が萎れちゃうかも」

「勇気だぁ？　何の話だよ」

「だからさ、告白の」

中也は顔を上げて、こちらの表情から何かを読み取ろうと懸命に見つめてくる。

予想もしてなかったってリアクションじゃあない。これが理由だという可能性も想像した上で、確かめるために二人きりで話せる屋上へ誘導したのだ。

「……映画を観たんだ。主人公は全人類を救えるけど、一匹の犬が死ぬ話」

「……犬が死ぬと、レビューでぼろくそ書かれるぞ」

「うん。犬が死ぬのがすごくつらくて、他のシリーズも観てみたんだけど、そっちはもっと悲惨だった。それで結局、みんなが助かって、犬が死んで、その後で主人公も死ぬ、こ

の話が一番ましだったんだなってことになって、……全部こうしようと思ったんだけど」

戦争も疫病も災害も起こらず、誰も死ななくて、頭も悪いし力もないから自分たちが救わなくちゃなんて考える必要もなくて、毎日他愛もないおしゃべりとゲームに興じていられる自分たちが存在しているなんて、思いもよらなかった。

「そんなのずるいじゃないか。中也、君も同じ思いをしてよ」

「……まだるっこしいな。一晩中悩んだのが馬鹿みてぇじゃねえか」

もう少しはっきり言えねぇのか？　と挑発しながら、緊張して指先に力が入ってしまっている姿が初々しい。

「どこの世界でも、君は小さくて可愛いね。大好きだよ」

黒いチョーカーを巻いた細い首に手を回し、小さいという言葉に怒った顔を引き寄せ、キスをした。乾いた唇をたっぷり濡らして、苦し気にあえいだ口の隙間から舌を滑り込ませると、途端に魚のように跳ねて逃げようとしたので、寄りかかっていた給水塔の壁に彼の背を押し付け、前から体重をかけて口付けを深くした。

彼の舌はびくびく怯えてこちらのされるがままだったけど、快感を拾うことはできたようで、舌の先端を愛撫すると、制服のシャツをぎゅっと掴んで甘い吐息をはいた。

「ねぇ……学校サボって、私と遊ぼうよ。中也」

互いの唾液でぐしゃぐしゃの唇を離してそう誘惑したら、中也は真っ赤になっていた顔の上に少し安心した表情を浮かべ、「今度は何の設定だよ」と言って微笑んだ。

私フォ３開催
おめでとうございます！

わん！のアニメ５話を観たときからずっと書きたかった異能中学生を書きました！数行書いてすぐ「あ…このおさむ、頭がわるいぞ？？？」という壁にぶち当たりコレがほんとの馬鹿の壁ってか（笑）と思いつつ小説だとあまりに別人だなぁ太中として楽しめないかもしれないと悩んだ末にこういう話になりました。マフィアでもない中学生同士だってことと、せっかくの WEB オンリーなので、全年齢で無配で出そう！と決意したのですが、普段イベントでは R18 作品しか出さないサークルなので、全年齢というのはどこまで書いていいのか分からず、「地上波のアニメの表現までなら OK」という教えを得て、エヴァを一気見しながら書きました。そしたらエヴァの影響を色濃く受けた恥ずかしいセカイ系になっちゃったってワケ（シャフ度）。おめでとう！ありがとう！終劇！

エヴェレットの多世界解釈と深淵重力次元絶対不滅幻想

2021/6/19 発行（※ PDF 無料ダウンロード作品）

繪子（うしろがみ）

Twitter：@EcosanB

Pixiv ID：2660047

※この本は個人的に作られた非公式ファンノベルです。原作者様・出版社様とは一切関係ありません。無断転載・複製・複写・インターネット上への掲載を禁じます。この PDF ファイルを意図せず入手された方は、データを削除して記憶からも消してください。

Ushirogami

BSD UNOFFICIAL
FANBOOK